

研修報告書 No.15

研修先： 医療法人白井会 田野病院、
馬路村立馬路診療所

地域研修として高知で1ヶ月間研修させていただき、その報告をさせていただきます。

所属する大学からは毎年6名程度、高知県で地域医療研修をさせていただいております。高知研修を終えた研修医は「へき地医療をどうすればいいのかわからないけど、どうにかしなきゃならないと思う」と口々に語っていました。ほかの地域にいった研修医より高知県にいった研修医の方が、地域医療について考え、影響を受けており、その姿をみて私も高知県を希望させていただきました。医師国家試験で、人口10万人あたり最もベッド数が多い県はどこか？という問題が出題されます。答えは高知県であり、その印象もあって比較的高知県は医療資源が充実した県だろうと思っていました。

しかし、研修地域である高知東部で研修していると、田野病院は常に満床ですし、医療従事者が足りずに職員が協力して時間外労働を行い、なんとか医療を支えていました。実際に統計を確認すると、確かに人口10万人あたりのベッド数は高知県が全国1位ですが、高知県内では医療資源の偏在があり、医者や看護師など医療従事者は高知県の平均を大きく下回っていました。

田野病院は訪問診療・看護・リハを行っている他に、デイケアや通所リハビリも行っており、急性期～回復期～居宅までを今まで見てきたどの病院よりもスムーズに行い、居宅に帰ったあともケアが継続して行われていました。医師・看護師・理学療法士等・ソーシャルワーカー・ケアマネージャー・ホームヘルパーがそれぞれ協力して地域を守っている、まさに理想的な構図だと思いました。しかし、これほどまでに連携がとられていても、ベッドは満床であり、医療従事者の不足から現場が疲弊していると感じました。田野病院ではそれぞれの職種の方々が、みんな自分の仕事の範囲を越えて仕事をし、まさにみんなの工夫と自己犠牲によりなんとか地域の医療が守られている状態と感じました。現在はなんとか医療が守れていますが、このまま現場の疲弊が続くと、東部の地域を守ることが困難になると感じました。

高知県内の医師の偏在を解消すること、医療従事者を確保することはとても難しい問題だと思いました。医療資源が少ない高知東部では仕事量が多くなることが予想されるため、医療従事者の誘致が難しく、仕事量が多いため負担減を求めて医療資源が流出していき、さらなる医療資源不足を招く負のループが起こっていると思います。へき地で先進医療を求めることは正直、難しいと思います。しかし、高知は高齢化が20年間すすんでいるといわれています。つまり、高齢者医療について高知は高齢化医療の最先端なのだと思います。どうすれば高知東部の医療を支えられるのか。へき地であるというメリットを生かして、へき

地医療のモデル地域を目指すということを考えました。総合診療医を目指す人や、へき地医療に関わる全ての人が勉強に来たいと思えるような、チーム医療で病院～在宅までがスムーズに移行し、地域みんなで支えあう地域になればと思います。総合診療医を目標にする若手医師にとっては、自分の力量が直接地域の健康につながるやりがい、自分が最後の砦であるという意識、限られた医療資源だからこそその予防医学とチーム医療の大切さが学べるまさに最適な環境だと感じました。高齢化最先端の高知で田野病院を中心とし、全国のモデルになるようなへき地医療を行い、多くの人が高知東部に学びに来るとい流れができればいいと思います。

へき地医療を通じて、結局医療は人と人とのつながりでできているのだと感じました。自主的に学びたいと意欲的な人々が集まってくるような地域にできれば、それが一番だと感じます。しかし、高知に1ヶ月いて多くの人々に触れ、縁もゆかりもない地域だったはずですが、まるで自分のふるさとのように感じる実りのある一ヶ月でした。本当に貴重な経験をありがとうございました。